

## ジャック・ロンドン研究の現代的意義についての一考察

芳川 敏博（京都府城陽市）

日本ジャック・ロンドン協会会長の辻井栄滋氏は、「朝日21関西スクエア」(2003.6 朝日新聞大阪本社発行)で、「ロンドンが生きた19世紀末～20世紀初頭は、豊かさの質が問い直されている点で現代と共通しており、現代は文明の自己矛盾を忘れないロンドンの訴えを再評価する時だ」と指摘し、再評価したい現代的意義を、環境問題と格差社会の2点に絞って述べられている。以上の発言は誠心的を得た提言であると思うが、ロンドンが問いかける現代的意義についてさらに考察したい。ロンドンは数多くの体験や思考形態を基に、40年間にわたる生涯に53冊もの著作を残している。極北から南国までの空間の横の軸と、放浪者から著名な作家という時間の縦の軸に囲まれた豊かな幅広い体験を通じて、いろいろな分野の作品の中で、ロンドンは真面目に、よりよい生き方を個人として考える一方、理想的な社会についても考えをめぐらした。

私が考えるジャック・ロンドンの現代的意義は、1)「人間とは何か」ということと、2)「人類の成長とは何か」という、文化的、文明的なものである。人間が地球の王様として君臨できたのは、他の動物と違って、「考える力」と「他の人と言葉を使って交流できる能力」のお陰であると思う。しかし、多種多様な情報が飛び交う「高度情報化社会」と、スピードと効率、そして最大利潤を追求する「過度な競争社会」にあって、人間は次のようになってきている。

- 1) どれが本当の客観的な情報で、それをどのように分析し考えればよいのかが、分からなくなってきている。
- 2) 情報が多すぎて複雑になり、だれも全体像を把握することが不可能になっている。
- 3) 大部分の人々は、一部の偏った情報を基に判断したり、物事を単純化して考えている。
- 4) 真実を見ようとしなければ、見えにくい社会になっている。
- 5) 多くの人々が思考停止の状態になりつつある。
- 6) ある問題に対して、早急に答えを求めたり、不必要な物や人は排除する傾向にある。
- 7) 間違いを恐れて、何も行動しなくなったりしている。
- 8) 人類共通の根本的な問題に対して無知であったり、無関心な人々が増えている。
- 9) 他人との違いについて、感情的に反応し、優しい言葉ではなく、暴力や無視で反応する傾向にある。
- 10) 人間は地球の王様になり、不利な条件にある人や動植物のことや、その人たちの痛みが分からなくなり、孤独な王様になってしまっている。

以上のように人間は、「考える力」や「交流する能力」を失いつつあり、まさに人間社会は大変危険な状態にある。このような危険な状態を脱するためには、「人間とは何か」や「人類の成長とは何か」について、私たち全体が話し合い、よい方向性を探る努力をする以外にない。それには、そのような時間的余裕があるスローライフの実現と、「真の文学とコミュニケーション学」の復活こそが、重要なことではないだろうか。

前述の辻井氏は、「文学とは人が生きるさまざまな生き方を想像力たくましく追体験する営みであり、それによって視野を広げ、建設的な批判力を養い、人間が人間らしく生きていくうえで必要不可欠のものである」とし、「浮薄な今の日本の有りようを見る時、じっくりと想像力豊かに行間を追い、とりわけ古典といわれる作品の読み直しが求められています」という見解を発表された。

それと同時に、他の人々や動植物と共存するために、異なった背景や価値観を持つ者との効果的なコミュニケーションの技術や方法の研究も不可欠である。ロンドンが生きた20世紀は交通通信手段が急速に発達して、異なった考えを持った人々や国々がいやおうなしに接触せざるを得ないようになった。しかし、人々は本当のコミュニケーションができないで、誤解したり、孤独になったり、人を自分より下の状況に追いやったり、粘り強く話し合いが出来ないで人を抹殺して排除しようとしたこともあった。

このように人類は文明の進行とともに自己中心的になり、他人や自然との共存ができなくなってしまった。つまり、人間は文明の進行につれて、ある意味では退化していると言える。自分が生き延びることが精一杯で、他人と本当の意味で交流・協力ができなくなり、信頼・愛情が希薄になってしまった。このような状況では、人間は単に過去の生活に逆戻りすることはできない。人間はあまりにも、豊かさのために、ひ弱になりすぎてしまったのである。

「複眼的思考と物事をより深く見ようとする五感」と「相手の痛みを考えて、違いを超えてよりよい共生社会の実現のためにコミュニケーションをし、他の人と協力して意欲的に行動すること」の2つがロンドンが提起した現代的意義であると思う。ロンドンの作品には、これらのテーマが内在しており、人間と人間社会の将来を考えるうえで、大変参考になる。ロンドンの扱うテーマは、1)個人と社会、2)適者生存、3)理性と本能、4)人間と大自然、5)人間と動物、6)人間と金、7)資本主義と社会主義、8)過去と未来、9)生と死、10)異性や多民族との関係、など幅広く、また内容が深い。これらの内容が考え抜かれた構成と見事な表現力で、読者の心の深いところに訴えかけてくる。

私たちジャック・ロンドン愛好家としては、人間の特権である「想像力と創造力」を生かし、ロンドンの作品を読み、いろいろな観点から話し合い、深く考え、他の人に伝えていくことが大切なのではないだろうか。ロンドンが時と空間を超えてくれた文学作

品と彼の生き方を通して多くのことを学び、21世紀が、「孤独な本能の社会」ではなく、皆がバラの周りで、楽しく人間復活の道を話し合う社会になることを切に願う。